

令和2年12月3日付・山陰中央新報



クリスマス会も遠隔で

松江・県立大サークル

施設利用者に歌を披露

県立大松江キャンパスの「CLSサークル」が立案した。ビデオ会議システム「Zoom（ズーム）」で遠隔クリスマス会を開いた。施設側が、外部とのやりとりを使うため導入した遠隔操作ロボットも使用。新型コロナウイルスの感染拡大で直接の訪問ができない中、学生と利用者が、楽しいひとときを共にした。

特別支援学校でボランティアに取り組み同キャンパスの「CLSサークル」が立案した。ビデオ会議システム「Zoom（ズーム）」と、連動して遠隔操作できるロボット「temi（てみ）」を8月に導入した、社会福祉法人みずうみ（同市法吉町）が協力して実施した。

クリスマス会には、ケアハウスはなうみ苑（同市西法吉町）の70〜90代の利用者3人が参加。学生たちはキャンパスからサンタクロースやトナカイのかぶり

物をかぶって、童謡「赤鼻のトナカイ」「あわてんぼうのサンタクロース」を身ぶり手ぶりを交えて歌った。

利用者は拍手で「とてもよかった」と喜んだ。続いて、事前に施設に届けていたクリスマスカードを遠隔操作のロボットを使って手渡すと、「ありがとう」

と感謝の言葉が伝えられた。

人間文化学部保育教育学科2年の亀尾明花さん（19）は「新型コロナウイルスで直接行けない中でも交流ができて、喜んでもらえてよかった。今後も遠隔でいろいろな施設と交流したい」と話した。

（糸賀淳也）

子どもの笑顔 思い浮かべて

県立大松江の学生 歌・踊り熱演

子ども向けの歌や踊りを、先輩に披露する学生



親子招けず先輩に披露

県立大短期大学部保育学科1年の学生たちが4日、松江市浜乃木7丁目の松江キャンパスで、乳幼児向けの歌や劇を楽しむ「キッズシアター」を公演した。親子を招待する恒例イベントは新型コロナウイルスを予防するため、観客を先輩学生のみとした。子どもたちの喜ぶ姿を意識して取り組んできた4人は、笑顔の见られないもどかしさを抱えながら集大成を見せた。(糸賀淳也)

キッズシアターは2018年4月の短期大学部改編を機に、学生の主体性と実践力を養う場として始まり今年で3回目。これまで親子約100人を招いていたが、密集が避けられないため招待は見送った。

学生側も新型コロナウイルスの影響で遠隔授業が続き、題材決めに入ったのは例年より2カ月遅い6月だった。それでも歌やダンス、クイズなど7グループに分かれ、脚本作りや演技を急ピッチで磨いてきた。

4日は、同学科の2年生42人を観客として入れて、半年間取り組んできた内容を披露。フェースシールドを着けて息の合った歌と踊りを披露したほか、クイズや人形劇で例年と変わらぬ熱演を見せ、大きな拍手が沸き起こった。

実行委員長の上村菜々子さん(18)は「開催できるか不安だった。実際の子どもの前ではできなかったが、先輩方のおかげでいいものができた。今後も子どもに伝わる歌やお芝居をしていきたい」と達成感をにじませた。

指導した渡辺寛智講師(47)は「子どもの反応を見ることができず、感染対策といった不自由もあったが、最後までやりきってくれた」と目を細めた。

切磋琢磨減らす懸念

島根県立大（本部・浜田市野原町）の学長を兼ねる理事長に、現職の清原正義氏の続投が事実上決まった。若者の県外流出を防ぐため県内出身の入学を増やす方針を掲げ、2021年度入試から新制度を導入する。過度な地元優遇は学生同士が刺激し合う環境を失われかねず、しっかりとした議論を重ねる必要がある。

清原氏は再任の方向が定まった4日、山陰中央新報社の取材に対し「引き続き島根県の大学として地域貢献を使命とし、地域の人材を育成する」と強調した。

17年4月の着任後、最も力を入れたのは入試改革で、県内出身の入学者をより多く獲得する制度を浜田キャンパスで21年度に導入する。

島根県立大 新入試制度

得する制度を浜田キャンパスで21年度に導入する。

総定員230人に対し、学校推薦型選抜に加え、共通テストや学科試験がなく、小論文や面接などで決める総合型選抜の募集人員は計90人で、変更前より15人増える。松江、出雲の両キャンパスでも県内枠を広げる方向で、22年度から新たな入試制度を適用する。

20年度が46・8%だった県内出身者比率（全キャンパス）を、将来的に50%以上に引き上げたい考えだ。

上がらぬ県内就職率

背景には卒業生の県内就職率が上がらないことがある。

15～18年度の県内就職率は44・9％、48・9％。県内出身者の7～8割が県内に就職する一方、県外出身者の多くが

地元優遇 しっかり議論を

（西部本社報道部・板垣敏郎）

県外に就職する傾向がある。このため、県内出身者の割合を増やし、県内就職者を確保したいとの意向がある。

県内出身者が県立大を敬遠しているわけではない。同大では20年度入試で、県内出身志願者のうち、約350人が不合格になっている。

清原氏は「実態に驚いている」と問題視する。人口減少に歯止めをかける人材を、大学入試の時点ではじめていることになるからだ。「県立病院が、地元県民の4割しか診察しなかったら怒るのと同じ」と述べ、県内出身者が多ければ多いほどよいという見解を示す。

公平性とのバランス

一方、過剰な地元優遇は学生同士の切磋琢磨をそぐのではという懸念は、教員の間では根強い。学力そのものよりも、そもそも学ぶ意識の低い学生の増加につながりはしないかという不安がくすぶる。

教員約40人で行く同大浜田キャンパスユニオンの執行

委員長でもある福原裕二教授（朝鮮半島政治論）は「県外出身の学生から受ける刺激が、本来あるべき姿だ」と新たな入試制度を疑問視する。

県立大は憲章で、「地域社会の活性化と発展に寄与する人材を養成することを使命とする」とうたう。特に人口減少が著しい県内で、担い手を育成すべきとの期待は大きい。

一方で、県内外を問わず公開された教育機関でもあり、地元重視か公平性重視かのバランスをどうとるかが問われる。魅力ある県立大はこうあるべきか、清原氏の再任とともに、県全体で議論する必要がある。

学長に清原氏再任 選考会議



島根県立大の学長を兼ねる理事長の選考会議（議長・久保田章市、浜田市市長）が4日、浜田市内であり、現職の清原正義氏（左）を再選した。任期は2021年4月から2年間。最終的には知事が任命する。

経営委員会に加え、教員（板垣敏郎）



清原正義氏の理事長兼学長続投が事実上決まった島根県立大。浜田市野原町、浜田キャンパス

柔道遊びで運動上達

苦手な子向けプログラム

県立大松江サークル考案

県立大松江キャンパス（松江市浜乃木7丁目）の「JUDOサークル」が、運動の苦手な子ども向けに運動機能育成プログラムの研究を進めている。特別支援教育を学ぶ学生が結成し、「バランスを崩し合うスポーツ」という柔道をヒントに、遊び感覚で行える運動を考案。県内の幼稚園教諭や保育士らに伝えている。（糸賀淳也）



帯相撲を演じる学生たちと持田祐里さん（中）

サークル顧問で特別支援教育を専門とする西村健一准教授によると、体を大きく動かし、バランスを取る運動が運動機能に関わる神経や筋肉の発達につながり、就学前の幼少期に取り組むことが重要だという。例えば柔道は「バランスを崩し合うスポーツで、楽しみながら体幹を鍛えるのに最適だ」と説く。

西村准教授のゼミで学ぶ保育教育学科3年の持田祐里さん（1）たち6人が、子どもが楽しみながらできて運動機能を発達させる運動を研究しようと今春サークルを結成。「バランス」「上半身」「下半身」の3点の発達に注目して体を動かす遊びを調べ、西村准教授の助言も受けながらアレンジした。

これまでに、2人が向き合って柔道の帯を引き合う「帯相撲」▽子ども遊び「だるまさんが転んだ」をアレンジし、振り返った鬼が物を投げる動作に応じて跳ねたり、しゃがんだりしてよける動作を取り

入れた「だれじゃー」など15種類の運動を考案した。10月には益田市内で実演して保育士ら教育関係者30人に紹介した。サークルの部長を務める持田さんは「緊張したが、喜んでもらえてうれしかった。引き続き、子どもたちが楽しみながらできる運動を研究する」と意気込み、研究成果は論文にまとめる考えだ。